

第1分科会 地域の教育力の再生と社会教育委員の役割

会場：関内ホール（小ホール）

研究テーマ

地域の教育力の低下が指摘される中、地域の教育力を再生していかなければならない。
その再生にむけた社会教育委員の役割について考える。

事例発表者

下諏訪町（長野県）

下諏訪町社会教育委員

依田 秀人 氏
栗林 かな代 氏
河西 優子 氏
黒澤 玲子 氏

海老名市（神奈川県）

海老名市社会教育委員会 議長

海老名市社会教育委員会 副議長

橋本 絵美里 氏
金田 ゆかり 氏

助言者

聖学院大学 准教授

若原 幸範 氏

会場責任者

三浦市社会教育委員

笹谷 月慧 氏

司会者

葉山町社会教育委員

中世 貴三 氏

記録

神奈川県教育委員会教育局県西教育事務所

社会教育主事（兼）指導主事

山崎 良徳 氏
宮川 由大 氏

1 はじめに 地域に誇りを育む学び — 星ヶ塔遺跡から始まる物語

星ヶ塔遺跡は、諏訪湖の北東約8km、標高約1500mに位置する黒曜石の鉱山遺跡で、全国的にも貴重な文化遺産である。この遺跡は約100年前に考古学者・鳥居龍蔵によって発見され、約3万㎡にわたり193か所もの採掘跡が確認されている。

下諏訪町社会教育委員会では、令和3年度から「星ヶ塔遺跡を題材に、どのような学びを通じて地域への誇りを育む物語を生み出せるか」をテーマに活動を進めてきた。地域住民が星ヶ塔遺跡の価値を自分ごととして捉えるための伝え方を模索する中で、「紙芝居」という表現方法に着目し、その制作を進めてきた。本発表では、地域の歴史資源を学びにつなげ、それを住民へ伝えるための実践と、その過程で得られた気づきを共有する。

2 実践内容 紙芝居でつなぐ星ヶ塔の魅力 — 試行錯誤の実践記録

令和3年度の活動では、星ヶ塔遺跡に関する学習や現地見学を行い、「もっと多くの人に星ヶ塔遺跡の魅力を伝えるにはどうすれば良いか」という問いが生まれた。この問いを軸に、レポート作成や意見交換を進め、公立諏訪東京理科大学の学生に向けたプレゼンテーションや見学会を、対面とオンラインの両方で実施した。学生からは興味を示す声が寄せられる一方、継続的な関わりは難しいとの声もあり、大学との連携は再検討することとなった。

令和4年度からは、子どもたちにも親しみやすく星ヶ塔遺跡の魅力を伝えるため、「星ヶ塔紙芝居プロジェクト」を立ち上げた。転機となったのは、黒曜石に関心を持ち、作画を得意とする黒澤委員が加入し、紙芝居制作の可能性が広がったことである。

委員全体でアイデアを出し合い、ストーリーは単なる紹介型から、過去にタイムスリップして星ヶ塔遺跡の時代を体験するファンタジー要素を盛り込んだ構成へと発展した。時代背景の正確性を追求するため図書館で資料調査を行い、議論しながら脚本と作画の修正を繰り返した。これにより、作画や配役だけでなく語りや効果音、構成など様々な工夫を凝らした温かみのある作品に仕上げることができた。

完成した紙芝居は令和5年度の長野県社会教育研究大会で事例発表され、町の図書館まつりなど地域イベントでも活用された。令和6年度にはB4サイズの一般向け紙芝居を制作し、YouTubeでの動画公開にも挑戦。委員が声を吹き込み、効果音を加え、自ら編集作業を手掛けることで、作品をより多くの人に届ける工夫を施した。また、オリジナル紙芝居箱を制作し、動画につながる2次元コードを貼り付けることで、多くの人に楽しんでもらえる工夫をした。

紙芝居は図書館や公民館、夏の寺子屋などで読み聞かせの機会を設け、地域の子どもたちや住民に広く届けられている。星ヶ塔遺跡の魅力を発信するこれらの活動により、協働による学びの新たな形を実現することができた。

3 社会教育委員の活動 個の力をつなげて学びに — 委員の主体的な挑戦

これまでは、教育長の諮問に応じて話し合いを重ね、調査内容をまとめる活動が中心だったが、今回のプロジェクトでは、委員それぞれが特技や経験を活かし、1つの活動に集約することで新たな学びの形を実現した。作画や脚本にとどまらず、アイデア出しやPR活動、意見交換など、あらゆる面で委員が協力し取り組むことで、地域に新たな社会教育活動の形を創出することができた。

4 成果と課題 地域に広がる学びと今後の展望 — 協働の力で創る社会教育

委員が主体的に協働し、ゼロから1つの学びの活動を創造できたことが最大の成果である。年齢や背景を問わず楽しめる紙芝居を完成させ、動画配信や寄贈を通じて幅広い層に星ヶ塔遺跡の魅力を届けることができた。活動を通じて学び合い、創り出す楽しさを実感し、社会教育の本質を再認識する機会となった。一方で、完成した紙芝居を今後どのように活用し、語り継いでいくかが課題であり、さらなる議論と工夫が必要とされる。

社会教育委員からのアイデアが諮問として採り上げられ、それを形にすることで答申するという自由な発想と主体的な姿勢は、社会教育の本質を体現している。紆余曲折を経て全員で1つのものを作り上げる面白さこそが、社会教育の醍醐味だと気づくことができた。今後は、学校、図書館、高齢者施設などでの上演を通じ、地域に根ざした社会教育の実践を継続していきたいと考えている。

<質疑応答>

【質問】社会教育委員は全員で何名いて、今回のプロジェクトにどのような関わりがあったか。また、委員以外の関係者はどのような形で、どの程度関わったのか。

【回答】社会教育委員は8名で構成されており、専門や立場の異なる委員全員が「紙芝居」という共通テーマのもと、アイデア出しや音声参加など、それぞれの形でプロジェクトに関わった。委員の中で完結した取組である。

【質問】紙芝居に描かれている黒曜石の使い方や鉱山の様子について、時代考証や科学的な確認を行ったか。また子ども向けの内容として、誤った理解を与えないよう配慮しているか。あわせて、今回の成果を今後どのように活かし、星ヶ塔遺跡や下諏訪町の魅力発信、さらにはまちづくりへとつなげていくのか。

【回答】時代考証は下諏訪町の学芸員に確認したが、あくまで子どもたちの興味を引くきっかけとして紙芝居を制作した。今後は読み聞かせや展示を通じて星ヶ塔遺跡や下諏訪町の魅力を広め、地域への関心や誇りにつなげていく予定である。



1 はじめに

海老名市は神奈川県の中央部に位置し、人口 14 万人を超える地域である。利便性の高い海老名駅には3つの路線が乗り入れ、駅周辺には大型商業施設が立ち並び、新しい地区「扇町」も誕生している一方、市南部では田園地帯が広がり、いちご農園が集まる「ストロベリーロード」がある。また、市内には国指定史跡の相模国分寺跡など、多くの文化財も存在する。

社会教育委員会議は 10 名で構成され、年6回程度会議を開催。図書館協議会を兼ねており、図書館長も参加して運営報告や意見交換を行う。校長先生や元 PTA 会長、社会教育関係団体関係者など多様な立場の方が委員を務め、子どもに関する活動を中心に学校教育と連携しながら健全育成を支援している。計画の立案にも主体的に関わり、地域の教育力再生に向けた取組を進めている。

2 実践内容

(1) 社会教育計画について

現行の社会教育計画は6か年計画で、「子どもの活動支援を通じ、人と人とのつながりを広め・深め、子どもと大人が共に育つ社会の構築」を目標としている。本市の社会教育は子どもに関する活動を中心に展開し、学校教育と連携して健全育成を支援し、前計画では地域学校協働活動を軸に、多くの社会教育関係団体と連携し、子どもたちに豊かな体験を提供してきた。現行計画では、団体間のつながりを広げ、活動共有の場を増やすことで社会教育を活性化し、子どもから大人までが学び合い、支え合う持続可能なコミュニティの構築を目指している。

(2) 目指す子どもの姿

子どもたちの成長を中心に、大人がどのように関わるかを共通認識として共有することが必要であると考え、育てたい子どもたちの姿を設定した。

海老名市が社会教育を通して育てたい子どもたちの姿

【 海老名がだいすき、夢をもてるえびなっ子 】

- ・海老名をだいすきになる子
- ・自分でできることに進んで取り組もうとする子
- ・好きなことを見つけることができる子
- ・友だちや大人と豊かにかかわることができる子
- ・元気にあいさつできる子

計画の具現化のため、「1. 社会教育団体の連携」「2. 地域での社会教育活動の充実」「3. 学習機会の充実」の3つの柱を設定しており、今回の発表では、特に「社会教育団体の連携」に関する取組を紹介する。

3 社会教育団体の連携

(1) えびなっ子ふれあいフェスタ

親子で社会教育活動を体験し、地域団体の活動を知る機会を提供するイベントを開催している。スポーツや茶道、二胡といった多様な体験を通じて、子どもが興味や得

意なことを見つける機会を目的としているのが特徴である。また、高校生や大学生にも協力を得て、世代を超えた交流の場としても機能しており、参加者からは「新しい体験ができた」「親子で楽しめた」といった声が多く寄せられ、地域の社会教育活動の普及とコミュニケーションの活性化に貢献している。

(2) えびなっ子いきいきシンポジウム

団体間の意見交換や教育長とのトークセッションなどを実施し、交流を図る場を設けている。意見交換では、年代や立場の異なる参加者が考えや思いを共有することで、多世代間の学びを促進し、社会教育への関心を高めるきっかけとなっている。参加者からは「大人も学べる場になっている」「自分ができることを考えるきっかけになった」といった声が寄せられ、社会教育の価値を再認識する場として好評を得ている。

4 成果と課題

(1) 活動の成果

社会教育委員が自ら事業を運営することで、会議での意見交換が活性化し、計画の具体的な実現につながっている。体験活動を通じて子どもと大人、さらには団体同士の新たなつながりが生まれたことで、社会教育活動の裾野を広げることに成功している。また、子どもを中心とした活動でありながら、大人も学びの機会を得ることで、社会教育の魅力を実感できる場が提供され、多世代で学び合う環境を築いている。

(2) 今後に向けた課題

協力団体の顔ぶれが限られている現状があり、より多くの団体に参加を促すための広報や周知活動の強化が求められている。また、大人が学び続ける視点をさらに充実させるとともに、若者世代を巻き込む多世代交流や大人向けの学習機会を提供することが課題として挙げられる。社会教育委員は、今後も多様な世代や立場の人々をつなぎ、子どもと大人が共に育つ社会を構築していくための活動を継続していく方針である。

<質疑応答>

【質問】 家庭の方針などで参加できない子どももいる中、周知や参加方法の工夫はどうしているのか。また、社会教育委員の活動を契機として、自主的な活動が生まれている事例があるか。

【回答】 周知は、市の小中学生保護者向け連絡ツールや学校掲示、社会教育委員や関係団体のつながりを活用して行い、幅広く情報を届ける工夫をしている。また、いきいきシンポジウムのグループ協議を通じて、団体や学校の先生が互いの活動を知り、協力や連携が生まれている。これにより新たな活動や体験の場が広がるきっかけとなっている。



グループ協議及び質疑応答

【質問】 事業実施にあたり、行政職員はどのように関わっているか。

【回答（下諏訪町）】 社会教育委員の自主的活動を支える形で、事務局として行政が関わっている。また、社会教育委員会議の開催や意見の集約、計画を形にすることに対して行政がサポートしている。

【回答（海老名市）】 ふれあいフェスタ・シンポジウムでは、担当課が実施場所や団体交渉など準備段階でサポートしている。当日は参加団体も積極的に運営や片付けに協力することで、人とのつながりが生まれている。

【質問】 「えびなっ子ふれあいフェスタ」には、たくさんの方が関わっていると理解したが、予算面はどうなっているか伺いたい。

【回答（海老名市）】 予算は消耗品費3万円のみで、体験活動に必要な物品を購入している。

【質問】 社会教育委員自らが動いているということに驚いている。社会教育委員は名誉職的で、やる気が見えにくい場合があるが、どう人選しているか。

【回答（下諏訪町）】 図書館協議会やスポーツ推進委員など、既存の委員会の中から代表を選出するほか、学識経験者や学校の代表として校長先生にも御参加いただいている。また、立候補される方や、地域で企画活動を行っている方に声をかけることもある。

【回答（海老名市）】 校長先生やPTA、市の文化芸術協会やスポーツ協会など役職で参加される方もいるが、活発に活動してくれ

そうな人に声をかける場合もある。

【感想】 社会教育委員の基本は計画立案や提言である。自由に活動できる場があることは、地域での実践や計画実現に重要だと考える。活動は義務ではなく、楽しさや意義を共有できることが大切である。

【質問】 PTA 役員になりたがらない人が多く、地域活動参加の課題となっているが、打開策はあるか。

【回答（海老名市）】 PTA はあくまできっかけであり、人とのつながりや活動の楽しさを体験すると継続する人が増える。「子どもと大人が共に育つ社会」を目指し、大人も子どもも関わる視点で活動を展開しているが、活動を楽しむことが参加者を増やすポイントだと考えている。

【感想】 地域の教育力低下・再生の課題に対して、大人への視点も含めた取組が重要である。



○地域の物語を掘り起こし、共有する実践について（下諏訪町）

発表テーマ・サブタイトルにある「私たちの物語をつくる」という視点が非常に印象的であった。地域に共有されている歴史や価値観、経験の積み重ねは「コミュニティ・ストーリー」として、地域住民のアイデンティティや誇り、愛着の基盤となる。地域のつながりが希薄化している背景には、こうした物語が見えにくくなり、共有されにくくなっていることがあると考えられる。

星ヶ塔遺跡や黒曜石といった地域の歴史資源を掘り起こし、学習を通して地域の特徴として再構成している点が重要である。学んだ内容を紙芝居という表現活動としてまとめ、子どもから大人まで共有しやすい形にしたことは、社会教育の実践として非常に意義深い。

読み聞かせなどを通して、物語が世代を超えて広がりつつある点は、今後の展開への可能性を感じさせる。

○計画を起点に交流と学びを広げる実践について（海老名市）

社会教育委員の重要な任務である社会教育計画を起点に、計画策定後も主体的に関わり続けている姿勢が高く評価できる。

「計画をつくって終わり」にせず、その後の実践まで担おうとする意欲が、活動の力強さにつながっている。

「ふれあいフェスタ」「いきいきシンポジウム」などを通して、社会教育関係団体や地域住民をつなげる場を創出している。世代を超えた交流や、多様な立場の声を集め、共有し、学び合う関係が生まれている

点は非常に意義深い。「もっと多様な人と意見交換したい」「海老名で子育てできてよかった」といった参加者の声は、社会教育が目指す姿を具体的に示している。

○社会教育委員の活動の活性化に向けて

計画づくりの過程で、地域に根付いてきた取組を社会教育として再認識・共有することは、「自分にもできる」という実感を生み、委員の意欲向上につながる。下諏訪町の取組と同様に、社会教育を地域固有の物語として言語化・共有することは、社会教育委員の活動の活性化に向けた大きなヒントとなる。

近年求められる「行動する社会教育委員」とは、計画策定や諮問対応に加え、自ら学び、実践する存在である。委員自身が社会教育の価値や楽しさを体感し、地域の他の人々に広げていくことが重要である。

個々の特技や経験を活かした実践を通して地域のつながりを育み、その成果を再び計画や政策提言につなげていくことが期待される。

大人同士が学び合い、つながる姿そのものが、地域の教育力を高めていく基盤となる。

